

大広間のステンドグラスが入れ替わりました!

大広間西側のステンドグラス「初夏」の一部が創建当時のステンドグラスと入れ替わりました。

「初夏」は大部分が創建当時のステンドグラスですが、一部は当時の写真などを参考に作られた復元です(写真1の黄色枠部分)。

旧川上貞奴邸は、昭和12(1937)年に敷地の一部と建物が川崎舎恒三氏(当時の大同製鋼常務取締役)に売却され、残りの敷地は分割して処分されたため、洋館部分は解体されました。残された和館部分の増改築にはその洋館の建材が転用され、現存している部材もあります。ステンドグラス



写真2(入替後)



写真1(入替前)

も同じように大部分が転用されましたが、今回入れ替えた部分(写真2の赤色枠部分)は外部に流出したのではと考えられており、長年行方不明になっていました。それが、平成26年に名古屋市内で発見され、復元の際に使用した当時の写真や、現存する当時のステンドグラス等と比較調査が専門家によって行われた結果、デザインやサイズ、ステンドグラスの型などが一致し、本物であることが証明されました。復元では青色の部分も実物は深い緑色でした。入れ替え後は絵が繋がって、右側のシャクナゲの木が手前にこんもりと茂る図柄になりました。1枚の絵として全体がまとまりました。

約80年の時を経て再び二葉館に戻ってきたこのステンドグラス、その光や風合いを実際にご覧ください。

IRODORI
いろどり

二葉館では貞奴の孫である川上初氏から寄贈されたゆかりの品や、当時の写真などを展示しています。今回は当時の写真の中から、建物を復元する際に参考にした写真についてご紹介します。



大広間から続くテラスで撮られた写真失われていたステンドグラスの一部が写っています。

復元された「初夏」の一部は、この写真と志村博氏(「初夏」の制作者、宇野澤ステインド硝子工場)からの聞き書きを参考に制作されました。

※写真の人物については詳細不明



食堂(展示室1)の外側を背景に撮られた写真(非公認) 上げ下げ窓が連続して円形の壁を構成しており、欄干には旧二葉荘(大同ライフサールビス所有時代の貞奴邸の名称)に転用されていたステンドグラス「アルプス」が写っています。このステンドグラスの寸法から上げ下げ窓の大きさを割出し、地面からの窓の高さを確定しています。また、テラスの柱との収まり具合や、柱に張られた石とモルタルの壁(ドイツ壁)との境目部分の人造石幅を決めることもできました。

※写真の人物については詳細不明



大広間の玄関方向が写っている写真ステンドグラス「踊り子」の一部(写真右奥)と両開きの扉が写っています。両開きの扉の奥は土間になっていて、玄関で靴を脱いでいた川上邸では使用用途がよく分かっています。玄関ホールへと続く扉は別にあるので、この扉は普段は使用されていなかったのではないかと考えられます。

現在も写真と同じ位置に扉があり、創建当時の建具を使用しています。

※写真の人物は貞奴の養子・川上広三氏

「山吹谷公園」



片端の東坂下なる鳥屋筋の辺は昔の那古野山の谷谷にて暮春の比は遊蕩の諸人酒さかなを携へ来り、山吹の花を賞で歌ひ舞ひなどせし地なるが、いつか武家の宅地となりて今も猶山吹のところに残れるは昔のおもかげなるべし。

口なしの色に咲きしもすゑの世の名に流れたる山吹の谷と書かれています(翻刻:江崎公朗「山吹の歩み」より)。

挿絵を見ると、谷の合間から川が流れ、山吹の花に囲まれながら酒を飲み舞う人々の様子が描かれています。現在、山吹谷公園の南から北、東から西にかけて緩やかな坂となつていますが、当時は急な坂で起伏に富んだ谷だったのかもしれない。「山吹の歩み」によると、山吹谷とは、東は禅隆寺、西は善光寺筋(高岳線)、南は鍋屋町、北は榎木町を指していたとあります。かなり広い範囲だったことが分かりますね。

尾張名所図会「山吹谷」



江戸時代になると、名古屋城築城にともない、この辺りは中級士族の屋敷が並ぶようになりました。恐らく、その頃から名所の風景が徐々に変わっていったので



しよう。今も晩春になると、公園には山吹の花が咲き乱れ、当時の名所の面影を留めています。

二葉館から西に歩いて5分ほどすると、「山吹谷公園」があります。向かいは、文化のみち榎木館です。公園には子どもが遊べる広場と遊具があり、昼間にお母さんと小さい子どもたちが遊ぶ姿をよく見かけます。西隣には、名古屋市立山吹小学校があり、子供たちの元気な声も聞こえてきます。「山吹谷公園」は昭和46年の開園で、それより以前には女学校がありました。昭和20年1月、空襲により生徒が避難していた防空壕を爆弾が直撃し、40名余りの生徒が亡くなっています。校訓と、名古屋市立第三高等女学校ここにありと記された石碑が、その悲しい歴史を物語っています。公園の一角に静かに建っているこの石碑は、鎮魂碑として建てられました。

from Archive

書庫棟から

「江戸川乱歩」



乱歩(本名・平井太郎)が、ここ名古屋で過ごしていたことは表面「探偵小説の『聖地』名古屋」で触れた通り、偉大な探偵小説家が栄の広小路界隈に住んでいたと知って、驚かれた方もいらっしゃるかもしれません。

名古屋との接点をもう少し見てみると、明治34(1901)年、名古屋市白川尋常小学校に入学します。その小学校の校舎は現在の白川公園がある場所で、昭和54年には石碑が建てられました。

この頃、大阪毎日新聞に連載されていた菊池幽芳訳「秘中の秘」を母に読んでもらい、探偵小説に興味を持つようになりました。

「仮面の恐怖」江戸川乱歩 ポプラ社
「三角館の恐怖」江戸川乱歩 ポプラ社

そして明治40(1907)年、愛知県立第五中学校(現・愛知県立瑞陵高等学校)に第二期生として入学します。しかし、病弱でよく学校を休んでいました。当時父は平井商店を営み、家は裕福であったため、「活字」を買込み友人と少年雑誌「中央少年」などを発行しました。読書が好きで、物語を織りなす「活字」に大変興味があったようです。名古屋で過ごした少年時代は、好きなことに好きに打ち込める恵まれた環境にあつたといえるでしょう。

乱歩が「活字」以外に興味を持ったことのひとつに、人形があります。「人でなしの恋」「押絵と旅する男」など乱歩の作品には度々人形が出てくるのをご存知でしょうか。幼い頃に「母から祖母からか、おそらくは草双子でも読んだのであろうか、ある怪異な物語を聞かされて初めて人形に関心を持ったと後に語っています。

幻想的で怪奇的な乱歩の文学世界観が、ここ名古屋で培われたと考えられると、とても興味深いですね。そして今秋、二葉館では企画展「江戸川乱歩と人形」を開催します!是非観に来てください。